

3. 教材研究編

3-1 内容項目

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成 27 年7月）において、内容項目に関して述べられていることを整理してみます。

◇本教材に関する内容項目 【感謝】

〔第5学年及び第6学年〕
日々の生活が家族や過去からの多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えること。

◇内容項目の概要

- ・よりよい人間関係を築くためには、互いを認め合うことが大切。その根底には、相手に対する尊敬と感謝の念が必要。
- ・人々に支えられ助けられて自分が存在するという認識に立つとき、相互に尊敬と感謝の念が生まれてくる。
- ・感謝の気持ちは、人が自分のためにしてくれている事柄に気付くこと、それはどのような思いでしてくれているのかを知ることで芽生え、育まれる。

◇感謝の対象

低学年	家庭や学校など、身近で日頃世話になっている人々。
中学年	家族など日頃世話になっている身近な人々に加え、日常の生活を支えている地域の人々や、現在の生活の礎を築いた高齢者などの先達。
高学年	人のみならず、多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っている生活そのもの、更にはその中で自分が生きていることに対する感謝まで広げる。

◇高学年の指導に当たって

- ・過去から、人々が何を願い、何を残し伝えてきたのか、それは自分の生活とどう関わり支えられているのかに気付くことができるようにすることが大切である。
- ・温かなつながりの中に自分の生活があることに感謝し、人々の善意に応じて自分は何をすべきかを自覚し、進んで実践できるようにするところまで指導する必要がある。

「毎日の生活の中で多くの人々に支えられているんだ。」
「当たり前になっていることも、それを支えてくれる誰かがいるんだ。」
子どもたちがこんな意識を、自分の生活と重ねながら持てるような授業をしたいですね。
他の内容項目においても、解説書で述べられていることを自分なりに整理してみてください。



3-2 教材の分析 (例)

人の行動や言葉の裏側には「心」が存在する。それは、ある考え方やその人がもつ価値観等である。道徳教材には、人物の道徳的な行為が描かれている場合が多い。人物の道徳的な行為の背景にある価値観等を、指導者がまず明らかにしておく必要がある。

登場人物の言葉や行動	言葉や行動の背景にある価値観等
<p>ある日のこと、2人は父に悩みを伝えた。</p> <p>「村の人たちは、私たちのことをほめてくださいますが、なぜか素直に喜ばません。<u>水戸藩の皆様や旅の途中で出会った多くの方々から受けたご恩にこたえたくても、こたえることができません。どうすればよいのでしょうか。</u>」</p> <p>2人の話を聞いた初右衛門は、目をとじて静かにこたえた。</p> <p>「<u>どうすることもできないが、今の私たちがこうして生きているのはどうしてなのか、これからも考え続けようではないか。</u>」</p> <p>父の言葉を聞き、<u>2人は、しばらくだまっていた。</u></p>	<p>○他の人々の善意に対して、感謝の思いを伝えたり、善意に応えたりすることは大切なことだ。</p> <p>○多くの人々に支えられ、今の自分の生活が成り立っているのだ。(気付き)</p> <p>○多くの人々に支えられ、今の自分の生活が成り立っているのだ。(気付き) 自分は何をすべきだろう。</p>

考えられる発問の例

- 「どうすることが、ご恩にこたえることになるのでしょうか。」
- 「つゆとときは、どうすればよいのでしょうか。」
- 「つゆとときは、悩む必要があるのでしょうか。」
- 「つゆとときが悩んでいることについて、どう思いますか。」
- 「父初右衛門は、2人に何を伝えたかったのでしょうか。」
- 「2人は父の言葉を聞き、どんなことを考えているのでしょうか。」等

どのような授業を行うかは、授業者の意図によります。どのようなことをじっくり考えさせたいのか、またどのようなことに気付かせたいのか、授業者が明確にして発問を決めることが大切です。

また、次のことに留意してください。教材に書かれている言葉や文が答えになるような発問では、読み取り中心の学習になってしまいます。



※ここでは、一場面を取り上げています。実際にはいくつかの場面を取り上げ、分析する必要があります。

3-3 発問の構成 (例)

道徳の授業づくりでは、発問の構成が大切である。言わば、授業の骨組みともいえる。発問の構成について、小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編には次のように示されている。

発問を構成する場合には、授業のねらいに深く関わる中心的な発問をまず考え、次にそれを生かすためにその前後の発問を考え、全体を一体的に捉えるようにするという手順が有効な場合が多い。

<発問を考える順序>

- ・ウ⇒イ⇒エ⇒アという順序で発問を考え、授業展開の全体像を描いた。
- ・ウは、中心的な発問であり授業のねらいに関わる。授業では多くの時間をかける。
- ・イは、ウにつながっていくような発問である。イの学習が、ウの学習を支えていく。
- ・エは、実生活への意識化を図るための発問である。ここでは無理に発表させなくてもよい。ノートにまとめさせたり、イメージマップ等を書かせたりすることも考えられる。
- ・アは、授業のスタートであり、短時間で本時の学習の見通しを持たせたり、動機付けを行ったりするものである。
- ・ア、イ、エの発問は、ウを最大限に生かすための発問であり、短時間で行う。

	発問の構成	発問の意図
ア	○『他人から親切にされたら、 <input type="text"/> べきだ。』 <input type="text"/> の中には、どんな文が入りますか。 ・ていねいにお礼を言うべきだ。 ・感謝の気持ちを態度で表すべきだ。	教材の中心場面と関連のある事柄について考えを持たせておき、教材を読んだ後に問題意識を喚起したい。 本時で扱う道徳的価値への方向付けである。
イ	○つゆとときの2人は、なぜこんなに悩んでいるのでしょうか。 ・あんなにお世話になったのに、何の恩返しもできないのは苦しいのだと思う。 ・大きな親切を受けて、そのままでは悪いと思っている。	感謝の気持ちを行為や態度で表せないつゆ、ときのモヤモヤした気持ちに共感させたい。 中心的な発問へのつながりの発問である。
ウ	◎どうすることがご恩にこたえることになるのでしょうか。 ・自分たちが受けた親切を、他の困っている人に返していくことがご恩に応えることになると思う。 ・多くの人たちのおかげで、今の自分たちがいるから、精一杯生きていくことがご恩に応えることになると思う。	多くの人々の支え合いや助け合いによって、今の自分の生活が成り立っていることに気付かせたい。 ねらいに直結した発問である。
エ	○皆さんが、こうして生活していけるのは、どれだけ多くの方の支えがあるからだと思いますか。	教材を通して生み出された考えや価値観を、自分たちの生活にあてはめて想像させたい。 実生活につなげる発問である。

3-4 学習指導案 (例)

1 主題名 「支え合いや助け合いに感謝して」

2 ねらいと教材

感謝について多面的に考えたり、自分の生活が多くの人の支えで成り立っていることを理解したりして、自分を支える多くのの人に感謝しようとする態度を育てる。

<教材名「病気の父を迎えに常陸国へ」、内容項目「感謝」>

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について (学習指導要領解説をもとに記述)

よりよい人間関係を築くためには、互いを認め合うことが大切であるが、その根底には、相手に対する尊敬と感謝の念が必要である。人々に支えられ助けられて自分が存在するという認識に立つとき、相互に尊敬と感謝の念が生まれてくる。そして、それは、日々の生活、あるいは自分が存在することに対する感謝へと広がる。感謝の気持ちは、人が自分のためにしてくれている事柄に気付くこと、それはどのような思いでしてくれているのかを知ることで芽生え、育まれる。

高学年においては、多くの人の支え合いや助け合いで成り立っている生活そのもの、更にはその中で自分が生きていることに対する感謝まで広げることが大切である。

(2) 児童の実態について (次のような内容を記述)

○ねらいとする内容項目に関わって、これまでどのような指導を行ってきたか、また児童がどのような体験や経験をしているのかを示す。また、その結果として、どのような成果や課題があるのかを示す。

○アンケートや意識調査等のデータから解釈することも考えられる。

○ねらいとする内容項目に関わって、これまでの指導や体験等の結果として浮かびあがる成果や課題から、補充・深化・統合の方向性を示す。

⇒これまでの指導等を振り返り、指導の機会や児童の経験が少ない場合には、本時でしっかり補う必要がある。つまり、補充という目的になる。

⇒これまでの指導等を振り返り、より一層深く考えさせたり、感じさせたりする必要があると判断すれば、それは、深化という目的になる。

⇒様々な機会学んだことを、合わせて考えさせたり、それらの関連に気づかせたりして、新たな感じ方や考え方を生み出すことを目的とすれば、それは統合といえる。

(3) 教材について (教材のあらすじや特質、教材の活用の仕方について記述)

本教材は、つゆとときの姉妹が、旅の途中で病気になった父親を常陸国(茨城県)まで迎えに行くという県内に伝わる実話をもとに作成されている。姉妹は、約2ヶ月間かけて常陸国までたどり着くが、旅の途中や常陸国に着いてからも、多くの人々から温情を受ける。ふるさとに戻り、多くの人のご恩に対して、何もできないことを悩み、自分たちのこれからの生き方を考え始めるといった内容である。

本時は、父親の言葉聞き、つゆとときが考えはじめる場面を活用し学習の中心とする。まず、指導内容に関する道徳的な問題状況を明らかにするため、つゆとときが何を悩んでいるのかを考えさせる。そして、その問題状況に対して、解決策を多面的に考えさせるような問題解決的な学習を展開していく。このように、感謝という道徳的価値を児童たちに多面的にとらえさせることができる教材である。

4. 学習指導過程

	学習活動・主な発問	予想される児童の反応	指導上の留意点
導入 3分	<p>1. 親切を受けたときの態度や行為について考える。</p> <p>『他人から親切にされたら、 □□□□べきだ。』</p> <p>○ □□□□の中には、どんな文が入りますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧にお礼を言うべきだ。 ・感謝の思いを態度で表すべきだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のねらいに関わる問題意識をもたせる。 ・2～3人程度、発表させる。 ・感謝について考えていくこと、大分県の実話であることを紹介し、教材を配布する。
展開 39分	<p>2. 教材を読んで、話し合う。</p> <p>○つゆとときの2人は、なぜこんなに悩んでいるのでしょうか。</p> <p>(中心的な発問)</p> <p>◎ どうすることがご恩にこたえることになるのでしょうか。</p> <p>(補助発問・・・必要に応じて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どうして、精一杯生きることがご恩にこたえることになるのか。 ・ 手紙を書いたり、探したりできないから悩んでいるのではないかな。 <p>3. 学習したことを自分の生活に置き換えて、想像してみる。</p> <p>○ 皆さんが、こうして生活しているのは、どれだけ多くの方の支えがあるからだと思いますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ あんなにお世話になったのに、何の恩返しもできないのは苦しいのだと思う。 ・ 大きな親切を受けて、そのままでは悪いと思っているから。 ・ 自分たちが受けた親切を他の人に返していくことがご恩にこたえることになると思う。 ・ 多くの人たちのおかげで、今の自分たちがいるから、精一杯生きていくことがご恩にこたえることになると思う。 ・ 感謝の気持ちを忘れずに生きていくことが、ご恩にこたえることになる。 ・ 自分の命や他の人のことを大切にしながら生きていく。 ・ 家族だけではない。 ・ 自分を支えている人はこんなにたくさんいるんだ。 ・ 今日1日だけでも、こんなにいるんだな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材は、教師が読み聞かせる。 ・ 道徳的価値に関わる問題の状況を明らかにしていく。 ・ ここでは時間をかけすぎないように留意する。 ・ 登場人物が抱える道徳的価値に関わる問題の解決に向けて考えさせる。 ・ グループ活動やペア活動も考えられる。 ・ ワークシートやノート等に考えを書かせる。 ・ 手紙を書いたり、相手を探したりなど物理的な解決策を述べる子には、できないから悩んでいることを伝え、他の考えに着目させる。 ・ ノートにまとめさせたり、イメージマップ等を書かせたりすることも考えられる。 ・ 家族だけではなく、いないと困る人等も想像させる。
終末 3分	<p>4. 補助教材「200年の時を経てつながる人と人の絆」を聞く。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ 補助教材の読み聞かせをして、本時の学習の余韻をもたせて授業を終わる。

3. 教材研究編

3-1 内容項目

中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成 27 年7月）において、内容項目に関して述べられていることを整理してみます。

◇本教材に関する内容項目 【国際理解、国際貢献】

世界の中の日本人としての自覚をもち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること。

◇内容項目の概要

○「国際理解、国際貢献」の必要性

- ・環境や資源，食糧や健康，危機管理など，一地域や一国内にとどまる問題ではない。
- ・日本人が自分たちだけの幸せを追い求めることに終始することは難しい。

○他国を尊重する

- ・他の地域や国々はそれぞれの文化や伝統，歴史をもっており，他の地域や国々がもっている理想等を，違いは違いとして理解する。

○国際的視野に立つ

- ・広く世界の情勢に目を向けつつ，国際理解に努める。

○世界の平和と人類の発展に寄与する

- ・日常生活の中で社会連帯の自覚に基づき，あらゆる時と場所において協働の場を実現していく努力こそ，平和で民主的な国家及び社会を実現する根本である。

◇指導に当たって

- ・他国には，日本と同じように，その国の伝統に裏打ちされたよさがあることや，その国の独自の伝統と文化に各国民が誇りをもっていることなどを理解させる。
- ・様々な文化のもつ多様性の尊重や価値観の異なる他者との共生などについても考えを深める必要がある。
- ・世界の平和と人類の発展に貢献する理想を抱き，その理想の実現に努めることが大切である。その理想の実現のための基本になるのは，どの国の人々も同じ人間として尊重し合い，差別や偏見をもたずに公正，公平に接するということである。

グローバル化が進む今の時代に生きる中学生には，日本のことだけでなく，世界の情勢に目を向けることの大切さや世界の平和について，他人事ではなく自分事として，考えさせたいですね。

他の内容項目においても，解説書で述べられていることを自分なりに整理してみてください。



3-2 教材の分析 (例)

人の行動や言葉の裏側には「心」が存在する。それは、ある考え方やその人がもつ価値観等である。道徳教材には、人物の道徳的な行為が描かれている場合が多い。人物の道徳的な行為の背景にある価値観等を、指導者がまず明らかにしておく必要がある。

登場人物の言葉や行動	言葉や行動の背景にある価値観等
<p>○「お願いがあります。停戦協定の書類に署名するまで、手術を待っていただけませんか。自分で署名して、停戦を確かなものにしたいのです。」</p> <p>○「今日の日本の政治、経済、文化は、過去一世紀にわたる東洋と西洋の融合の産物です。そういった意味で、日本は東西のかけ橋となり得ると思います。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他の地域や国々は、それぞれの文化や伝統、歴史をもっており、違いは違いとして理解し尊重していかなければならない。 (国際理解, 国際貢献) ・どんな困難があっても、自分の決めた目標は最後までやり遂げなければならない。 (克己と強い意志) ・他の地域や国々は、それぞれの文化や伝統、歴史をもっており、違いは違いとして理解し尊重していかなければならない。 ・日本のことだけを考えるのではなく、世界の情勢に目を向け、他国のことも考えていかなければならない。 ・世界の平和と人類の発展に貢献したい。

考えられる発問の例

- 「重傷を負いながらも、重光はなぜ自分の手で署名することにこだわったと思いますか。」
- 「自分の手で署名することと、他の人が署名することに違いがあるのでしょうか。」
- 「『日本は東西のかけ橋となり得る』という言葉には、重光葵のどんな思いが込められていると思いますか。」
- 「『日本は東西のかけ橋となり得る』とは、私たちがこれからどのようにしていくことだと思いますか。」
- 「重光葵は、今を生きる私たちに、どんなことを期待していると思いますか。想像してみてください。」
- 「重光葵の生き方から、あなたは何を学びましたか。」等

どのような授業を行うかは、授業者の意図によります。どのようなことをじっくり考えさせたいのか、またどのようなことに気付かせたいのか、授業者が明確にして発問を決めることが大切です。

また、次のことに留意してください。教材に書かれている言葉や文が答えになるような発問では、読み取り中心の学習になってしまいます。



3-3 発問の構成 (例)

道徳の授業づくりでは、発問の構成が大切である。言わば、授業の骨組みともいえる。発問の構成について、中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編には次のように示されている。

発問を構成する場合には、授業のねらいに深く関わる中心的な発問をまず考え、次にそれを生かすためにその前後の発問を考え、全体を一体的に捉えるようにするという手順が有効な場合が多い。

<発問を考える順序>

- ・ウ⇒イ⇒エ⇒アという順序で発問を考え、授業展開の全体像を描いた。
- ・ウは、中心的な発問であり授業のねらいに関わる。授業では多くの時間をかける。
- ・イは、ウにつながっていくような発問である。イの学習が、ウの学習を支えていく。
- ・エは、実生活への意識化を図るための発問である。ここでは無理に発表させなくてもよい。ノートやワークシート等にかかせたりすることも考えられる。
- ・アは、授業のスタートであり、短時間で本時の学習の見通しを持たせたり、動機付けを行ったりするものである。
- ・ア、イ、エの発問は、ウを最大限に生かすための発問であり、短時間で行う。

	発問の構成	発問の意図
ア	○「日本は東西のかけ橋」とは、どういう意味だと思いますか。想像してみてください。 ・日本が、他の国と国の間に立って関係をつくる。 ・太平洋近くの国と大西洋近くの国をつなぐ役割。	教材の中心場面と関連のある言葉の意味を想像させ、教材を読む際の興味を持たせるとともに、学習の方向を示したい。 本時で扱う道徳的価値への方向付けである。
イ	○重傷を負いながらも、重光葵はなぜ自分の手で署名することにこだわったと思いますか。 ・自分の手で何とか平和を取り戻したい。 ・他の者には任せたくない。停戦を確実にしたい。	国と国の衝突を武力ではなく、話し合いで解決すべきだという重光葵の信念を理解させたい。 中心的な発問へのつながりの発問である。
ウ	◎「日本は東西のかけ橋となり得る」という言葉には、重光葵のどんな思いが込められていると思いますか。 ・二度と世界大戦を起してはならない。 ・国と国が争うことは不幸なこと。日本が、中心となり世界の平和をつくっていくのだ。	他の地域や国々は、それぞれの文化や伝統、歴史を持っており、違いは違いとして理解し、尊重していかなければならないことを重光葵の演説や重光葵の言動を参考にしながら考えさせたい。 ねらいに直結した発問である。
エ	○世界の平和と人類の幸福のために、私たちにできることを考えてみましょう。 (「私たちの道徳」P217) ・他の国の文化や伝統を正しく理解していくこと。 ・外国で今、何が起きているのかを知るように努力すること。	日本のことだけを考えるのではなく、世界の情勢に目を向け、他国のことも考えていかなければならないことを気付かせたい。 教材を通して生み出された考えや価値観を、実生活につなげる発問である。

3-4 学習指導案 (例)

1 主題名 「世界とともに生きる」

2 ねらいと教材

平和は、全ての人々が考えるべき重要な課題であることを理解させ、日本のことだけを考えるのではなく、広く世界の情勢に目を向けようとする態度を育てる。

<教材名「日本は東西のかけ橋」、内容項目「国際理解、国際貢献」>

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について（学習指導要領解説をもとに記述）

今日、私たちが抱える問題、例えば環境や資源、食料や健康など、どれも一地域や一国内にとどまる問題ではない。したがって将来の日本を担う中学生には、日本のことだけを考えるのではなく、国際的視野に立ち、広く世界の情勢に目を向けつつ、日本人としての自覚をもって国際理解に努めることが必要である。国際社会の中でグローバルに活躍するために必要な態度や考え方である。

このような態度や考え方の基本となるのは、国によってももの感じ方や考え方、生活習慣などが違っても、どの国の人々も同じ人間として尊重し合い、差別や偏見をもたずに公正、公平に接するという道徳的な価値である。そのことを踏まえ、平和は、全ての国々の人々が模索すべき道徳的課題の一つであるということを理解させる必要がある。

(2) 生徒の実態について（次のような内容を記述）

○ねらいとする内容項目に関わって、これまでどのような指導を行ってきたか、また生徒がどのような体験や経験をしているのか示す。また、その結果として、どのような成果や課題があるのかを示す。

○アンケートや意識調査等のデータから解釈することも考えられる。

○ねらいとする内容項目に関わって、これまでの指導や体験等の結果として浮かびあがる成果や課題から、補充・深化・統合の方向性を示す。

⇒これまでの指導等を振り返り、指導の機会や生徒の経験が少ない場合には、本時でしっかり補う必要がある。つまり、補充という目的になる。

⇒これまでの指導等を振り返り、より一層深く考えさせたり、感じさせたりする必要があると判断すれば、それは、深化という目的になる。

⇒様々な機会で学んだことを、合わせて考えさせたり、それらの関連に気づかせたりして、新たな感じ方や考え方を生み出すことを目的とすれば、それは統合といえる。

(3) 教材について（教材のあらすじや特質、教材の活用の仕方について記述）

本教材は、大分県出身の重光葵の生き方をもとに作成されている。重光葵は外交官として上海に赴任し、国同士の衝突を話し合いで解決しようとするが、日本は戦争の道を歩んでいく。そして、重光葵は戦後の日本を国際連合に加盟させるために尽力し、国連総会の場で世界中が認める演説を行った。

本時は、国連総会における重光葵の演説の言葉を活用し中心的な学習とする。まず、重光葵が停戦協定を自らの手で行おうとする場面を考えさせ、平和への強い信念を理解させる。そして、「日本は東西のかけ橋となり得る」という言葉に込められた重光葵の思いを考えさせていくようにする。将来の我が国を担う中学生が、日本のことだけでなく、世界の情勢に目を向けていく大切さを意識できる教材である。

4. 学習指導過程

	学習活動・主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入 3分	<p>1. 「日本は東西のかけ橋」という言葉の意味を考える。</p> <p>○「日本は東西のかけ橋」とは、どういう意味だと思いますか。想像してみてください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本が、他の国と国の間に立って関係をつくる。 ・国と国をつなぐ役割。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のねらいに関わる問題意識をもたせる。 ・2～3人程度、発表させる。 ・この言葉は、大分県出身の重光葵の演説の言葉であることを紹介し、教材を配布する。
展開 44分	<p>2. 教材を読んで、話し合う。</p> <p>○重傷を負いながらも、重光葵はなぜ自分の手で署名することにこだわったと思いますか。</p> <p>(中心的な発問)</p> <p>◎「日本は東西のかけ橋となり得る」という言葉には、重光葵のどんな思いが込められていると思いますか。</p> <p>※生徒の考えを的確につかんだり、さらに考えを引き出したりする補助発問を必要に応じて使うようにする。</p> <p>(補助発問・・・必要に応じて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、そう思うの。 ・本当にこれでよいのかな。 ・○○さんの考えをみなさんはどう思いますか。等 <p>3. 学習したことを自分の生活に置き換えて考える。</p> <p>○世界の平和と人類の幸福のために、私たちにできることを考えてみましょう。</p> <p>(「私たちの道徳」P217)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の手で何とか平和を取り戻したい。 ・他の者には任せたくない。停戦を確実にしたい。 ・二度と世界大戦を起してはならない。 ・国と国が争うことは不幸なこと。日本が、中心となり世界の平和をつくっていくのだ。 ・これからは、日本が中心となり世界の平和を進めるのだ。 ・戦争の悲惨さを知っている日本だからこそ、世界をつなぐ役割ができるのだ。 ・他の国の文化や伝統を正しく理解していくこと。 ・外国で今、何が起きているのかを知るように努力すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教材は、教師が読み聞かせる。 ・重光葵の考え方や信念を理解させる。 ・ここでは、時間をかけすぎないよう留意する。 ・時間短縮のため1～2分程のペアトーク等も考えられる。 ・ねらいとする道徳的価値に関わる学習であるので、時間をかけ、グループで話し合わせたり、ワークシート等を書かせたりする活動も考えられる。 ・一つの考えに集約するようなことはせず、それぞれの考え方の違いが見えるように板書に整理し、多面的に捉えさせるようにする。 ・「私たちの道徳」P217 やワークシート等に考えを書かせる。
終末 3分	<p>4. 「私たちの道徳」P219 のメッセージを読む。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・「私たちの道徳」P219 のメッセージを読んで、本時の学習の余韻をもたせて授業を終わる。